

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2020 年度
氏名	神坂 健太郎	指導教員 (主査)	笹川 智子

論文題目	義憤の生起が精神的健康に及ぼす影響—特性怒りと規範意識に着目して—
------	-----------------------------------

本文概要

【問題と目的】怒りとは、欲求充足が阻止された時にその阻害要因に対して生じる感情であり（心理学事典, 1999）、心身の健康に負の影響を及ぼすことが古くから記述されてきた（Lindon & Feuerstein, 1981）。怒りは大きく分けて義憤と私憤の2つに分類される。私憤とは、損害が私的な利益に関係するとき喚起される怒りである（Lieberman & Linke, 2007）。一方、義憤とは自分が被害を受けたかどうかに関係なく、ある出来事やそれに関与した人物の行動が道義に反しているという知覚によって引き起こされる怒りのことを指す（O'Mara et al., 2011）。近年、社会的正義を根拠に他者への非難や攻撃を行う現象が報告されていることから、本研究では義憤に焦点を当てて、その生起過程に「特性怒り」と「規範意識の高さ」が影響するという仮説のもと、義憤の喚起が精神的健康に及ぼす影響について検討していくことを目的とした。

【方法】（1）予備調査：2016年から2018年までの新聞記事のうち、法律に違反する事件で、複数回にわたって広く報道された220件を抽出した。各ニュースの概要を作成し、大学院生5名によって類似しているものをグループ化した。各グループから代表的かつ義憤を喚起すると考えられたニュースを抽出し、大学生51名を対象に、そのニュースに対して、1. 道徳違反の知覚の程度、2. 怒り喚起の程度、3. 自己関連度に関する10段階の評定を求めた。その上で、道徳違反の知覚と怒り喚起の程度が十分に高く、自己関連度が比較的低い位置で正規分布に近い形をしている3つを義憤喚起刺激として抽出した。（2）本調査：私立大学生206名を対象に、集団式の質問紙調査を行った。はじめに①フェイスシートで年齢と性別を尋ねた上で、②行動基準尺度（菅原他, 2006）を用いて規範意識の高さと、③日本語版 STAXI（鈴木・春木, 1994）による特性怒りの高さを測定した。また、義憤喚起刺激呈示前の状態怒りについても同尺度で測定を行った。その上で、予備調査で抽出された3つのニュースから構成される義憤喚起刺激を呈示し、道徳違反の知覚の程度、怒り喚起の程度、および自己関連度を尋ねた。そして、④STAXIを用いて状態怒りを再度測定するとともに、⑤ Stress Response Scale (SRS)-18（鈴木他, 1997）への回答を求めた。

【結果と考察】（1）予備調査：選定した5つのニュースに対する1. 怒り喚起の程度、2. 道徳違反の知覚の程度、3. 自己関連度の記述統計量を算出し、ヒストグラムを作成した。ニュース1, 2, 5の怒り喚起と道徳違反の知覚の程度が高く、自己関連度が正規分布に近い形状を示したことから、これらを本調査で用いる義憤喚起刺激として採用した。（2）本調査：義憤喚起刺激の呈示前後の状態怒り得点についてt検定を行った結果、得点が有意に上昇したことが確認された($t(202)=2.92, p<0.05$)。行動基準尺度の5因子と特性怒りが義憤喚起刺激呈示前後の状態怒りの得点変化を予測し、その変化量がSRS-18の3因子を予測するという因果モデルを作成し、パス解析を行った。モデルの適合度指標はGFI=.98, AGFI=.95, CFI=1.00, RMSEA=.00と良好であった。規範意識と特性怒りのいずれも、義憤喚起刺激呈示前後の得点変化を予測しなかったが($\beta=-.05\sim-.13, p=n.s.$)、義憤喚起刺激による得点の変化は、SRS-18の「不機嫌・怒り」因子の得点を予測していた。このことから、特性的な怒りやすさと、規範意識の高さが義憤感情の喚起に影響することは確認できなかったが、義憤の喚起はストレス反応の一部に影響を与えることが示唆された($\beta=.15, p<0.05$)。